

「貪瞋痴(とんじんち)」

TVニュースを見ていたら「貪瞋痴(とんじんち)」という言葉に出会いました。お坊さんが「人には3つの毒がある」とおっしゃって、この言葉を話されたのです。気になってネットで調べると「心の図書館」(<http://www.tamano.or.jp/usr/tosinobu/book2/karoyaka.html>)という所がありました。よい内容なので、そのままご紹介したいと思います。

《引用開始》

お釈迦さまのお言葉に、「水をくみ出したならば舟は軽やかに進むであろう」というものがある。たとえば、遊園地の池に浮かんでいるような手こぎの小舟があるとす。この舟の中に水が一杯たまっていると、重くて漕いでもなかなか進んでくれないが水をきれいにくみ出してしまおうと軽やかに進むことができる。それと同じように、私たちの心の中が水びたしになっていると冷たく重苦しくて仕方がないが、水をくみ出してしまえば軽やかにのびのびと生きていく事ができる。心の中に何も無いのが心のいちばん理想的な状態だからであり、何も無い心のことを「無心」という。この心の中にたまった水のことを仏教では煩悩(ぼんのう)と呼んでいる。

人間には百八つの煩悩があると言われ、除夜の鐘を百八つつくのはこの煩悩を退治するためだという。しかし鐘をついたぐらいでは、なかなか煩悩は退治できるものではない。

●三毒(さんどく)

数ある煩悩の中で「貪りの心」「怒りの心」「愚痴の心」の三つを人間をいちばん苦しめる毒薬という意味で「三毒」とよんでいる。仏教では「怒り」を「瞋り」の字で書きあらわし、「貪瞋痴(とんじんち)の三毒」とひとまとめに言うことが多い。

★一番目の「貪(むさぼり)の心」とは、自分の好きなものに執着し、欲のために心が病気になることである。白隠禅師の歌に、「知者も善者も浮き世を見るに色と金には皆迷う」とあるように、色と金に迷う人がいちばん多いようであるが、「欲を心から離れてみやれ 何がなくとも充分じゃ」となりたいたいものである。

★二番目の「怒りの心」は、自分の嫌いなものに対して反発したり腹を立てたりする心をいう。怒りの心が、どのぐらい自分自身を苦しめるかは、喧嘩をした時の不愉快さを思い出してみればよく分かる。さらに怒りがこり固まって恨みとなると、かなりの重症である。怒りは人を損なうことが大きいけれども、反省して改めれば比較的退治しやすい煩悩と言われ、怒りの病に対しては「忍」が治療法である。忍とはひたすら耐え忍ぶといった消極的なことではなく、自分の気に入らないことがあっても腹を立てずに冷静に対処できる積極的な心のことである。貪りの心は自分の好きなことに執着する心、怒りの心は嫌いなものに反発する心だから、好き嫌いの激しい人はそれだけ苦しみの多い人生を送ることになるのかも知れない。

白隠禅師の歌に曰く。

「人に対して腹立つときは 早くおのれが愚痴と知れ」

「人の善し悪し眼に立つうちは 恥じて修行に精出しゃれ」

★三番目の「愚痴の心」は、「道理をわきまえない愚かな心」と説明されている。全てのことを自分の思い通りにしたい、自分だけは年を取らず病気にならずいつまでも生きていたい、好きな人とだけお付き合いして嫌いな人は顔も見たくない、というわがままな心のことである。この愚痴の心は「無明」とも呼ばれ、迷いの心の根源とされる。愚痴の心から貪りの心がおこり、貪

りの心あるところには必ず怒りの心がある、というように三毒が出そろう、さらに様々な煩惱に枝分かれしていくのである。愚痴の心に対しては、当然のことであるが「道理をわきまえた明らかな知恵」が処方箋となる。自分の好き嫌いに合わせて世界が回転している訳ではないから、道理をわきまえて道理に自分を合わせるのである。

白隠禅師の歌にいわく。

「よきも悪しきもよそより来ぬぞ 迷う我が身の心より」
「死ぬもめでたい生きるもめでた とかくこの世は仮の宿」

●**靈妙なる仏心** このような三毒に代表される心の水を、きれいにくみ出してしまった人が「**本当の生きた仏様**」なのであり水一滴のこっていないきれいな心のことを「**仏心**」という。そして、すべての人が生まれながらに「**靈妙なる仏心**」を持っているというのが大乘仏教のいちばん重要な教えなのである。
心の水をくみ出して大切な仏心を守り、軽やかに安らかに生きていきたいものである。

なにも思わぬは仏の稽古なり 至道無難禅師

《引用終了》

今回は長文の引用を致しましたが、貪瞋痴(とんじんち)という三毒をなくした状態が「なにも思わぬ」という状態ということです。まあ、私は満65才になり、少しは「三毒」から遠のいてきたかも知れませんが、それでも、欲もあれば、怒りもあり、無知な状態もあり、まだまだ程遠い状態です。別のネットでは「痴」を「**群盲象を評す**」(数人の盲人が象の一部だけを触って感想を語り合う、という**インドの寓話**)を例にあげており、物事の一面だけを見て知ったかぶりする危険をあげておられます。私は、職業柄この「痴」すなわち「群盲象を評す」という事を起さないようにいろんな角度からチェックするように心得ています。

「妄想」という言葉がありますが、迂闊にイケルと思いつくことがあり「貪」の欲望が勝手に膨らんでしまうケースがあります。私は、その妄想を実際にブレイクダウンして実践できるように構想化する「**実現法**」を描くようにしています。船井先生は「**本物の4条件**」で「誰でも出来る」という実践の重要性を説いておられますが、まさに、幾ら「イケル」と思っても実践が難しいようでは展開しても失敗に終わってしまうのです。「妄想～構想～実践」という事がポイントなのですが、イケルというハイな状態から、一度、現実に戻って実践法を考えるとというレベルに立って「**構想**」を練るようにしています。

それにしても「なにも思わぬは仏の稽古なり」という言葉から、若い時に、会社や仕事の不満を母に漏らしたのですが、その度に「**無になれ**」と教えられたのを思い出します。母の言っていた事がようやく理解できたように思います。また、別の表現をすると「**器量**」にもつながると思います。「**器量**」こそ、これからの修行課題と肝に銘じて、年相応の経営コンサルティングができるように心がけて行きたいと思います。

【AMIニュースのバックログは<http://www.web-ami.com/siryu.html>にあります！】